

## 社会科学習指導研究委員会

### 一 テーマ

社会的事象を身近な事象と捉えることを目指して ～地域教材を生かした授業づくり～

### 二 テーマ設定の理由

今日教員には、子どもたちに基本的知識や技能を確実に習得し、主体的に粘り強く学習に取り組む力を育むことが求められている。社会科学習指導研究委員会では、この「子どもの主体的な学び」について「なるほど！そういうことか！」「よし、できた！」といった子どもたちの「わかる」や「できる」といった喜びが学びに対する意欲の高まりや思考の深まりとなり、その積み重ねが子どもたちの主体的な学びにつながるのではないかと考える。

そのために、全ての子どもが社会的事象を「身近」なものとして捉え、自分事として主体的に取り組む力を育むため、地域素材の“ひと・もの・こと”をどのように生かしていけばいいのか、地域に眠る素材の掘り起こしや発掘した教材をどう子どもたちと出合わせるのかについて研究した。

また、教材研究と併せて、地域素材を用いたことが、子どもたちの学びとどう結びついたのかについて、実際の子どもの姿から考察していき、小・中の事例をもとに研究し、子ども一人ひとりの「自分事」として物事に迫ったものになりたいと考え、本テーマを設定した。

### 三 研究の経過

本年度は、上田市立北小学校と上田市立第三中学校の授業と共同研究の場としての上小社会科研究会内での意見交換等を通して、研究テーマである「社会的事象を身近な事象と捉えること」について、委員や参観者の視点から語られる子どもたちの学びの姿について迫っていった。

### 四 研究の内容

#### 1 北小学校の実践から

北小学校で進められている「地域の果樹栽培を通じた学習」を題材に、授業の深化を目指した検討が行われた。北小学校の佐藤教諭からは、「桃の価格の違いを通して、地域の農業を多面的に捉えさせたい」という実践が紹介され、他の教員からは「生産者と販売者の



違いに焦点を当てて考えさせるのは面白い」「桃の学習を終えた後、ブドウとの共通点や相違点を比較する展開もできる」といった意見が出た。また、子ども達が地域の生産者にインタビューすることや、果樹園の変化を社会的視点で見学することなど、次の授業づくりにつながる具体的アイデアも共有された。また、社会科学習指導研究委員会で、実際



に山寄さんの果樹園に取材に伺った。1つの地域素材をこうした校種を超えて多人数で取材することで、様々な視点で質問が出され、教材研究を深めるのと同時に、実際に「ひと・もの・こと」に我々が会うことで社会科の面白さや奥深さを体感できる機会となった。

(1) 小学校の公開授業

単元名「山寄さんのくだもの作り」

10月8日(水) 3年2組

①本時の主眼


ブドウの箱詰めを経験した子ども達が、大人2人で箱詰めするなら、丁寧にやっても15分あればできそうなのに、2時間もかかっている理由を考える場面で、山寄さんの工夫に着目し、箱詰めの意味を山寄さんの行動から読み取ることを通して、お客さんの希望に応えようとする山寄さんの思いに気づくことができる。

②本時の位置(13時間扱い中11時間目)

③指導上の留意点

- ・資料の読み取りが難しい子どものためにペア学習やグループ学習を取り入れる。

④展開

学習活動	予想される児童の反応	時間	支援・評価	資料
1、学習問題と自分の予想を確認する。	学習問題: ていねいにやって15分かかるのはわかるけど、なんで2時間もかかっているのかな。			
2、山寄さんが箱詰めしている様子を資料から読み取る。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・お客さんのためにていねいにやって15分かかるのはわかるけど。</li> <li>・いったい何をしているのかな。</li> </ul>	5		学習カード
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・傷がないかチェックするんだ。</li> <li>・お客さん1人ひとりに合わせて、箱詰めするブドウの種類を変えている。</li> </ul>	15	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子ども達が知りたいと思っている山寄さんの箱詰めの様子がわかるものとして、作業の様子の資料を提示する。</li> </ul>	・作業の様子の資料
学習課題: 山寄さんは箱詰めの時にどんなことをしているのか、作業の様子の資料から考えよう。				
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ブドウの重さを量っている。</li> <li>・足りなかった場合は果樹園までまた採りに行くんだ。</li> <li>・お客さんのために1つ1つ中身を変えて箱詰めしているんだ。</li> <li>・傷ついたブドウを売るとお客さんが嫌な思いをするとから、チェ</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>・どんな作業をしているのか、どれだけ時間をかけているのかに着目するように伝える。</li> <li>・「どんな人が注文しているのか」と疑問が出た場合は、毎年買ってくれるお客さんがいることを伝え</li> </ul>	

<p>3、山寄さんが時間かけて箱詰めしている理由を考える。</p> <p>4、本時をふりかえる。</p>	<p>ックしているんだと思う。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・形を整えるのもお客さんが喜ぶためだと思う。</li> <li>・重さを量るのはお客さんが欲しい重さにするためだ。</li> </ul>  <ul style="list-style-type: none"> <li>・足りないブドウを取りに行くのは、お客さんが欲しいものを届けるためにやっていることだ。</li> <li>・お客さんのために紙で包んだり、緩衝材を入れたり、ブドウが傷つかないようにていねいに箱詰めしている。</li> <li>・お客さんのためにおいしいブドウを届けようとすると、2時間かかってしまう。</li> <li>・山寄さんはお客さんのために重さを量ったり、種類を分けたりしているから、2時間必要だ。</li> </ul>	<p>る。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「お客さんのために」という意見が出たところで、全体に問い返し、お客さんのための作業ということに気づけるようにし、活動3に移る。</li> </ul>  <p>見が出たところで、全体に問い返し、お客さんのための作業ということに気づけるようにし、活動3に移る。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・掲示した写真資料に子どもの「お客さんのため」という意見を直接書き込み、写真の活動と工夫を結び付けやすくする。</li> <li>・「お客さんのため」という考えで、意見が出尽くしたところで学習問題に立ち返り、活動4に移り、本時のふり返りを行う。</li> </ul> <div data-bbox="885 1254 1468 1444" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>評価：お客さんの希望に答えようとする山寄さんの思いに気づくことができる。(発言・カード)</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ふり返りが書けたところで、全体に伝えるようにする。</li> </ul>	<p>学習カード</p>
--	---	---	--------------

⑤小学校の授業を振り返って

①本物に触れるということ

今回の授業では、「本物に触れる」ということが、子ども達の思考に大きく影響していた。


それは、本時の学習問題である「丁寧にやって15分かかるのはわかるけれど、なぜ2時間もかかるのか」という子ども達の間いにも見ることができる。この学習問題に至った経緯として、前時の学習で、実際に梱包用の箱を使い、自分たちでブドウを入れる模擬体験をしたからだ。実際に体験すると2分もかからず梱包を終えてしまう、初心者である自分たちでさえ、短時間でできる作業なのに、ベテランである山寄さんはなぜそんなに時間をかけているのか見当がつかなかったからこそ、出てきた本時の学習問題であった。




## ②山寄さんの想いに心を寄せる子ども達

学習問題に対してN児は、「お客さんに良いものを食べてほしいから、手洗いなどをしている」と、注文をしてくれた「お客さん」のために衛生管理や一房一房ブドウを丁寧に扱っているから時間がかかっていると予想した。多くの児童もN児と同じように「虫がついていないか、傷がないかどうか見ている」や「ブドウ同士がぶつかって傷がつかないようにするため」など、お客さんに「良い物を提供したい」という山寄さんの想いをくみ取って時間をかけていると予想した。

作業工程の資料を教師から配付されると、N児は、1つ1つの作業時間や内容を食い入るように見つめる姿があった。そして作業の中で、ブドウを重さごとに分ける作業に注目し、重さが違うと、注文をしたお客さんが困ってしまうからこそ、重さごとに分けて、お客さんが望む重さごとに箱詰めをするから時間がかかっているという考えに至っていた。

これまで何度も山寄さんに出会い、想いを聞いてきたN児は、山寄さんが考えるお客さんを大切にするという視点で作業工程を見ていくことで、山寄さんに迫った答えが導き出されたものであった。

作業	①選ぶ	②注文のかくにん	③ふくはずし	④重さ調べ サイズアップ箱を整える
様子				
作業時間	2分	5分	10分	20分
作業内容	10個ずつの箱にブドウを詰め、重さを調べます。	注文のかくにんを調べ、重さの違うものを取り除き、正しい重さになるまで調整します。	10個ずつの箱にブドウを詰め、重さを調べます。重さの違うものを取り除き、正しい重さになるまで調整します。	10個ずつの箱にブドウを詰め、重さを調べます。重さの違うものを取り除き、正しい重さになるまで調整します。

作業	⑤重さごとの箱詰め	⑥ダンボール作り	⑦はこ詰め	⑧足りないぶどうを しゆりかく	⑨はこ詰めかん違い
様子					
作業時間	10分	3分	40分	10分	10分
作業内容	10個ずつの箱にブドウを詰め、重さを調べます。重さの違うものを取り除き、正しい重さになるまで調整します。	ダンボールの作り方を学び、実際に作ります。	10個ずつの箱にブドウを詰め、重さを調べます。重さの違うものを取り除き、正しい重さになるまで調整します。	10個ずつの箱にブドウを詰め、重さを調べます。重さの違うものを取り除き、正しい重さになるまで調整します。	10個ずつの箱にブドウを詰め、重さを調べます。重さの違うものを取り除き、正しい重さになるまで調整します。

## ③視点の転換点

「なぜ大変な重さ調べをしているのだろうか」という教師の問いかけにN児は反応した。「お客さんの希望する量でなかったらダメ。だから、時間をかけている」と発言した。その直後、R児から「依頼された量より多すぎたり、少なすぎたりすると、山寄さんも儲けちゃったり、損したりしちゃうそう」とR児の量に付け加えられた発言があった。すると、H児が「儲けたり、損したりする」という発言を受け、「お客さんが喜んでくれて、また買ってもらえるってことは、全部自分（山寄さん）のためになると思う」とつぶやいた。

これまで「お客さんのため」という視点でのみ考えていた山寄さんの仕事が巡り巡って、「山寄さん自身のため」という視点が出てきた瞬間だった。

## ④考えを再構成し始めるN児

振り返りの場面でN児の手がしばらく止まった。そして、「一つ一つミスがないように、完璧に渡して食べてもらいたい」と書いた。振り返りを書く前に、「山寄さん自身のため」について友だちの考えを聴いていたN児にとって、振り返り序盤の時間は、これまで自分の中で揺るがないものであった「お客さんのため」という想いが揺らぎ始めていた時間だったのかもしれない。

振り返りを発表し始めたH児の「お客さんのためでもあるが、山寄さん自身のために2時間もかけている」という発言と、教師の「だから、2時間もかけているんだね」という言葉に反応し、「完璧に渡して食べてもらいたい」という部分を消し、「見通しや確認をして届ける。ゆっくり丁寧にやる。自分のため、お客さんのため」と書き換えた。授業冒頭で提示された、なぜ2時間もかけるのかという問いに対し、まさに自分自身と山寄さんとを往還しながら、考えを再構成していた。

## 5 自分事として考えるための地域素材

本物に触れることで見えてくる社会的事象がある。しかし表面的に触れるだけでは、その本質に迫ることはできない。今回の研究を通して強くそれを感じた。

実際に山寄さんからお話を伺う中で、果樹栽培の工夫をたくさん聞くことができた。リンゴだけでは儲けが少ないので、他の人がやらない果樹栽培の工夫を通して、果物の味や色付きをよくしていること等について、自信とゆるぎない信念をもってお話して下さる姿が印象的であった。

表面上の捉えでは、リンゴやブドウ、桃をお客さんにおいしく食べてもらいたいから時間をかけている、と考えるだけに留まってしまうものであった。しかし、これまで、子ども達が、山寄さんの熱意や心情に触れたからこそ、「お客さんに対する誠実な行動の大事さ」が基となって作業していることが、共通認識の上で学びが展開される流れになっていた。そして、本時では、お客さんにだけ向いていたベクトルが180度回転し、自分や家族のことを考えた時には収入という視点を持つに至ったのではないだろうか。また、視点が広がった所を教師が大切に取り上げたことで、子ども達の中でも意識が確立していたともいえる。どんな場面でも、子ども達の考えを大切にしていける重要性も垣間見ることができた。

研究の柱でもある「ひと・もの・こと」に子ども達が継続的に触れていく中で、より社会的事象が自分事となり、新たな視点をもって事象を捉えるということが本実践を通して見えてきた。また、上小社研の教諭方と共に何度も意見を交わし、様々な角度から山寄さんを捉えたからこそ、子どもの思考に耐えうる柔軟な授業が展開できたのではないかと推察している。

## 6 授業者のふりかえり（授業者 S 教諭）

授業づくり研究会では、お客さんのために工夫されている山寄さんの価値も大切だが、自分の生活のために、工夫されている山寄さんの価値にも気づかせることが社会科として必要であるとの意見をいただいた。そこで、山寄さんの営みを多角的に考えることができないか模索したものの、まずはお客さんのために様々な工夫をしている山寄さんという意味づけができることが、本単元でつける力であると考え、指導案を作成した。

しかし、本時の学習ではR児の「自分のため」という意見を受けて、N児のように「お客さんのため」という考えがゆれた児童やH児のように「お客さんのための工夫は、自分のための工夫とつながっている」と考える児童が表れ、山寄さんの工夫を多角的に考えることができた。

授業者の反省としては、指導案に多角的に追究する子どもを盛り込むことができなかつたことである。学習問題をたてる場面から「お客さんのために」という意識が強かった子ども達であったので、「自分のため」ということにも気づける資料や出をすることで、授業の計画段階で、多角的に追究する授業づくりができたのではないだろうか。



(2) 第三中学校の实践から

单元名「中部地方の特色ある産業」

10月8日(水) 2年1組

社会科学学習指導委員会のフィールドワークで、山寄果樹園を見学させていただき、山寄さんから上田市の果樹栽培の最前線について教えていただいた。さらに、教材研究を進め、その内容は小中学校で共有した。その中から、山寄さんの次の三つの言葉を中学校の授業に生かしたいと考えた。

- ・「養蚕からリンゴの生産に切り替えた理由は、リンゴの方がもうかったから」
- ・「現在は、単価の差や気候変動などから、リンゴの生産だけでは農園を続けていくことは難しい。現在、力を入れて生産している果物は、ブドウと桃。ブドウと桃は、比較的暑さに強い」
- ・「ブドウでは、(新しい品種である)クイーンルージュの生産に力を入れている」

教科書では、「中央高地の扇状地では、水はけのよいことを生かして養蚕から果樹栽培に切り替えた」という記述がある。しかし、長野県でリンゴの栽培が減少し、ブドウの生産が増加しているという記述はない。身近な場所で果樹栽培に取り組んでいる山寄さんの生の声を、中学校地理の中央高地の農業の学習と関連させてぜひ生徒に伝えたいと考えた。

また、上田市は中央高地にあり、第三中学校は扇状地に立っている。通学区にはリンゴ畑があるが、生徒たちは身近な場所の農業の様子と地理の学習で学んだことが繋がっていることに気づいていないことが多い。自分たちも中央高地の扇状地にある学校で学んでおり、授業で学んだ内容が実際に身の回りで起きていることに気付いてほしいと思い、本時の授業を構想した。

①ねらい

中央高地の農業がどのように変化してきたかを考える場面で、中央高地の農業の変化の様子を様々な資料をもとに調べ、ノート等にまとめた結果を伝えあうことを通して、中央高地の農業が立地や気候などの地理的条件とともに、製糸業からの転換や農業に関わる人々の努力によって変化してきたことを理解する。

②本時の位置 全5時間中第3時

③指導上の留意点

- ・資料の読み取りと結果の共有を、ジグソー法を使って行う。
- ・結果の共有はICTを活用して行い、他の班の結果も参照できるようにする。

④展開

段階	学習活動	予想される生徒の反応	時間	・指導 ○評価
導入	<p>①長野県が生産量全国1位・2位・3位の農産物を予想し、地図帳で確認する。</p> <p>②それらの農産物の生産量が全国上位になった理由を予想する。</p> <p>③地図帳で、長野県と東</p>	<p>・長野県は、リンゴの生産量が全国2位だね。ブドウは2位、桃は3位だ。</p> <p>・レタスの生産量は全国1位だね。</p> <p>・長野県の気候が、それらの農産物の栽培に適していたんじゃないかな。</p> <p>・地形も関係するんじゃないかな。長野県は山地や山脈があるから。</p> <p>・松本(長野)と、宮古(岩手)や仙台</p>	10	<p>・長野県が生産量上位の農産物を予想させ、ノートに書かせる。</p> <p>・発表させる。</p> <p>・地図帳の統計資料を提示し、長野県と東北地方(岩手県・宮城県・福島県)の気候を比較さ</p>

	北地方の気候を比較する。	(宮城)、福島(福島)の気候を比較すると、大きな違いはないように見える。福島県では、桃の栽培はさかんだけど、レタスはさかんじゃないね。		せ、気候だけが生産額上位の理由ではないことに気づかせる。
	学習問題：中央高地の農業は、どのように変化してきたのだろう。			
展開	④上田城付近の古写真から、土地利用が変化していることをつかむ。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・上田城付近は、今とは違う。</li> <li>・農地だ。何を作っているのだろう。</li> <li>・上田市や長野県、中央高地でも同様の変化があるのだろう。</li> </ul>	15	<ul style="list-style-type: none"> <li>・上田城付近の古写真を提示し、中央高地の農業が変化していることをイメージさせる。</li> <li>・Google スライドに資料を添付し、クラスルームで資料として配布する。</li> <li>・必要な資料を選んで学習課題の答えを出すように指示する。</li> <li>・グループ内の共有が上手くいかないグループに入って支援する。</li> </ul>
	学習課題：中央高地の果樹栽培や高原野菜の栽培がどのようにさかんになったのか、様々な資料から読み取って調べよう。			
	⑤果樹栽培を調べるグループと高原野菜の栽培を調べるグループに分かれ、それらの生産がどのようにさかんになったのかを資料から調べる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・果物チームとレタsteamに分かれて調べよう。</li> <li>・桑畑からリンゴの生産に変わった。</li> <li>・扇状地や昼夜の温度差といった中央高地の地理的条件が、果物の栽培に適しているんだね。</li> </ul>		
	⑥グループごとのジグソー法で追究する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・現在はリンゴだけでは生活できないんだ。ブドウは有名なブランド品があり、単価も高い。また、暑さにも強いんだ。</li> </ul>	10	○中央高地の果樹栽培と高原野菜の栽培がさかんな理由を多面的・多角的に考察し、ノートにまとめられたか。
	⑦調べたことをグループ内で共有する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・高原野菜の栽培は、他県が出荷できない時期に出荷できる。収益を高めるための工夫なんだね。</li> </ul>	10	○まとめた内容を友だちと積極的に共有しようとしていたか。
	⑧クラス全体で共有する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・それを可能にしているのは、交通インフラの整備と発展だね。</li> </ul>		
終末	⑨本時に分かったことをノートにまとめる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・中央高地の果樹栽培と高原野菜の栽培は、生産者の方々が気候と地理的条件をうまく生かし、収益を高めるための工夫を重ねてさかんになったんだ。</li> </ul>	5	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本時のまとめをノートに記述する。</li> <li>・数名指名し、共有する。</li> </ul>
	⑩発表する。			

## ⑤中学校の授業を振り返って

### ①成果

- ・小学校部会と同じく、山寄さんの農業への取り組みを教材化したことは、中央高地の農業の特色を生徒に分かりやすく伝える上で効果的であった。中央高地の農業が養蚕から果樹栽培に転換した理由や、長野県の果樹栽培の中心がリンゴからブドウに移りつつあることなどを、「養蚕業よりリンゴ栽培の方がもうかった」「気候変動の影響や単価の差から、これからはリンゴよりもブドウや桃に注力していく」という山寄さん自身の言葉で資料にすることができ、生徒の追究にも生かされていた。
- ・今回、資料を Google スライドにして提示した。資料の数は9つでかなり多かったが、1つのスライドにつき資料を1～2つにしたことで、生徒はスライドを進めたり戻したりしながら大きな問題なく読み取ることができていた。一つのスライドを映すと他のスライドは画面から消えるので、それが資料の読み取りやすさにつながっていたと考えられる。
- ・ジグソー法で共有した際、あるグループでは新たな問いが生まれた。高原野菜を調べたチームは「中央高地では冷涼な気候であるから夏に高原野菜を栽培している」と発表し、果樹栽培を調べたチームは「気候変動で暑くなってきているから、リンゴ栽培からブドウ栽培に力を入れるようになっていく」と発表した。そこで「同じ長野県なのに、『涼しい』と『暑い』が出ているのはなぜ？」という疑問をもった生徒がいた。時間の関係で教師から「レタスは野辺山、果樹栽培は上田市の市街地に近いところ。同じ上田市でも、レタスを栽培している菅平高原と、果樹栽培をしている第三中学校周辺では、気候が違うでしょう？」と伝えた。生徒は「ああ、そういうことか」とつぶやいていた。ジグソー法の新たな良さを感じた。

### ②課題

- ・本時の学習課題は「中央高地の果樹栽培や高原野菜の栽培はどのようにさかんになったのか、様々な資料から読み取って調べよう」であったが、実際の学習活動は「中央高地で果樹栽培や高原野菜の栽培がさかんになった理由」を調べていた。学習問題・学習課題と、実際に授業で行う学習活動の整合性が取れていなかった。授業構想の段階で整合性が取れるようにすべきであった。
- ・生徒に提示する資料の順番が、生徒の意識とずれていた。資料1は第三中学校付近の土地利用の変化を地形図から読み取るものであったが、多くの生徒の追究意欲はそこではなく、農業生産額や栽培面積の変化、リンゴとブドウの単価の違いなどに向いていた。土地利用の変化は、授業終盤のまとめの部分で、第三中学校付近でも本時学習した内容の事実が見られることの根拠として示されるとよかった。生徒の意識に沿った資料の提示の仕方を工夫したい。
- ・「高原野菜」「果樹栽培」のチームに分かれてジグソー法を行ったが、「気候」「地形」「交通」の視点に分かれてジグソー法を行っても良かった。生徒の追究意欲に沿った授業展開を考えたい。
  - ・上小社会科教育研究会で大切にしている「『ひと』『もの』『こと』との関わり」を大切に、資料をどのように生徒に提示し、どんな事実を見出せたいのかを明確にして授業に臨めるとよかった。

## ⑥中学校の授業を振り返って（授業者 N 教諭）

今年度、公開授業を行ったのが上田市立北小学校と上田市立第三中学校で、同じ通学区にある。北小学校で山寄さんの農業への取り組みを授業化する中で、その成果を中学校の授業で何とか生かせないかと思い、指導案を作成した。

社会科で大切にしている「『ひと』『もの』『こと』との関わり」の中で、中学校社会科では『ひと』との関わりが最も難しいのではないかと思う。決められた授業時数の中で、多くの学習内容を扱わな

なければならないからである。しかし、最先端の情報は人が持っている。山寄さんが「これからはリンゴだけでは生活ができない。今後、力を入れる農作物は、ブドウと桃」という言葉は、小学校部会と合同で行ったフィールドワークなくしては得られない情報であった。

上小社研で小学校部会と中学校部会が合同で情報交換をし合い、授業の構想を練ることは、中学校の教諭方にとっては大きな学びになると思われる。なぜなら、小学校社会科での『ひと』に迫る学びを中学校社会科に生かすことで、学習内容を生徒がより身近に、真に迫るものとしてとらえられるようになると思うからである。今回の授業では、山寄さんの農業への取り組みを資料として深く掘り下げることはできず、教科書にある資料を補完するような形でしか山寄さんの言葉を資料化できなかつた。それが反省点である。今後も小学校部会と合同で授業研究を進め、地理分野のみならず、歴史分野や公民分野でも、研究の成果を十分に踏まえた資料づくりや授業づくりを行っていきたい。



これからも生徒たちが社会的事象をより多面的・多角的に、深く学んでいけるように、小中両部会で連携して研究を進めていきたい。

引用：上小社会科研究会 塩築・木曾大会 上小支部レポート

## 五 社会科学習指導委員の実践や教材研究（委員会に参加しての学び）

### 1 上田市立神科小学校 M 教諭

#### ○地域素材の教材化について

- ・見つけた素材：砥石米山城 上田城
- ・実践可能な学年：6 学年「戦国の世から天下統一へ」
- ・教材化することで見えてくる素材の可能性：

山城である砥石米山城と城下町である上田城の立地の比較から、鉄砲伝来⇒長篠の戦い・安土城城下町&大阪城の城下町あたりが、信長や秀吉の専売特許ではなく、その時代の戦国大名達の有効な手段であり、上田市もまた城下町から発展してきたことに気が付く。

#### ○単元構想

単元展開	
教材との出会い (1 時間)	課外クラブや神科小 PTA も参加するお祭り「砥石米山城祭」の紹介と上田城の想起。自分の体験や写真を比較し、違いや理由を考える。
深まり (2 時間)	資料「年表（砥石米山城が先で上田城が後と分かるもの）」「鉄砲伝来」「長篠の戦い」「キリスト教⇒南蛮貿易」「楽市楽座」等の資料から、再び考える。平地に城下町を作り経済をまわして鉄砲・弾・火薬を買う方が強いことを確認する。
まとめ (3 時間)	名古屋城・大阪城・上田城・松本城など各地に城下町があり、今でも都市として残っていることと、信長・秀吉のその他の政策の確認を行う。

### ○委員会に参加しての学び

上記のように考えてみたものの、委員会へ参加して教諭方のお話を聞く中で、歴史の授業においても焼夷弾等の自分で触ることができるものや体験できるものが地域素材としての価値が高いということを知り、この授業は実施しなかった。併せて、学校の敷地内にある学童クラブが、政治分野の単元「子育て支援の願いを実現する政治」の地域素材として適していることを教えていただいた。しかし、その単元は終わってしまっていたので、次の機会には取り上げてみたいと考えている。

佐藤教諭が皆さんに相談している姿を見るだけでも、社会の授業を考える思考みたいなものが伝わってきて学びになった。社会科の視点というか疑問に思うひっかかりをもてる感性のようなものが自分自身についていないから地域素材のことがわかっていないのだろうと思う。

日ごろ教科書に書かれていることを押さえるだけで限界の日々の中で、さらに地域素材を組み込んでいく難しさと、子ども達にとって教科書に書かれている出来事が自分事になる有効性を感じた。

## 2 上田市立武石小学校 A 教諭

### ○地域素材の教材化について

- ・見つけた素材：小山林産
- ・実践可能な学年：5 学年
- ・教材化することで見えてくる素材の可能性

毎年「自然教室」で交流している小山林産さん。木登り体験やツリーハウスなどの体験をさせていただいているが、本来はどんな仕事をしているのか追究していくことで、林業について地域の人から学ぶことができる可能性が考えられる。

### ○単元構想

単元展開	
教材との出会い (2 時間)	「木を切ること」は良いことなのか、良くないことなのか問いをもった子どもたちが、林業を生業としている「小山林産」の仕事について写真や動画から知る。実際に聞いてみたいことをまとめ、取材をする。
深まり (5 時間)	「外国産の安井木材がある中で、なぜ小山林産の人たちは、手間をかけて武石の山を守り、気を切り出し続けているのだろうか？」という問いについて追究していく。 植える、下草を刈る、枝を打つ、間伐するといった林業のサイクルを学んでいく。小山林産が大切にしている「100 年先を見据えた森づくり」の視点から、長い年月と苦労が必要であることを調べていく。 「木材」ができるまで、切り出した木がどのように加工され、私たちの手元に届くのか地域の材木屋への取材から調べ、地産地消の仕組みを学んでいく。 「もし小山林産の人たちが山の手入れをやめたら、武石はどうなる？」という問いから、土砂災害の防止、水源のかん養、CO2 吸収など、林業が地域防災や地球環境に果たす役割を考えていく。
まとめ (3 時間)	「100 年後の武石に豊かな森を残すために、今の自分たちにできること」を話し合い、「武石の林業・応援リーフレット」を作成し、地域の公共施設に展示する。また、小山林産の方々から感想をもらう。

### ○委員会に参加しての学び

地域素材を教材化することは、教員個人にとっては負担が大きく、困難を伴う作業である。しかし、

今回の社会科学習委員会による活動は、普段は一人の力では挑戦しきれない教材開発を実現する貴重な機会となった。

委員会のメンバーで共に山寄農園の現場へ足を運んだことで、多角的な視点から取材を進めることができた。それぞれの専門性や感性に基づいた多様な視点が交錯することで、教材研究の深化につながり、私自身にとっても大きな学びとなった。組織的な教材開発の重要性を再認識するとともに、地域の産業を多層的に捉える視座を得ることができたと感じた。

### 3 上田市立東小学校 F 教諭

#### ○地域素材の教材化について

- ・見つけた素材：学校内に保管されている焼夷弾
- ・実践可能な学年：6 学年
- ・教材化することで見えてくる素材の可能性

学校周辺に落ちた焼夷弾に実際に触れることで、子どもたちにとって遠い昔に起こった戦争が、生活の一部として存在していたと感ずることができきっかけとなる。

#### ○授業構想

単元展開	
教材との出会い (1 時間)	実際に焼夷弾に触れ、その重さや感触を体験する。B29 から大量に落とされる映像と共に、なぜ多くの焼夷弾を落とす必要があったのか、戦争とはどういう物だったのかという問いをもつ場を設ける。
深まり (4 時間)	学校誌 (100 周年) に書かれている戦時中の学校生活の記述や教科書で書かれている集団疎開や社会科見学で行った象山地下壕等の情報を基に、戦争の広がりを確認する。
まとめ (2 時間)	戦争体験をした地域の方をお招きし、学校生活や空襲などについてお話をさせていただく。最後にこれまでの学習から、戦争に対する自身の考えをまとめる時間を設ける。

#### ○委員会に参加しての学び

多忙な中、一人で教材開発をすることは大変な事である。また、子どもと材が出会った時に、教師の学びの辿り方を子どもになぞらせるだけになる可能性もある。今回山寄さんと出会い、多くの委員と教材研究を行って行く中で、様々な視点で素材を見ることが大切だということに改めて気づくことができた。どこまで教師は知っているべきなのか、どこまで子どもと情報を共有していればいいのか等、多くの先輩の教諭方からのアドバイスを聞き、私の教材研究にも生かしていきたいと強く感じる時間ができた時間となった。

### 4 丸子北中学校 Y 教諭

#### ○地域素材の教材化について

- ・見つけた素材：丸子地域のお寺にある「差別戒名」 ※扱いには相当な注意が必要
- ・実践可能な学年：2 学年
- ・教材化することで見えてくる素材の可能性

身近に部落差別があった実態を知ること、より自分事として江戸時代の身分制度について理解を深めるとともに、当時の人々の考えに触れることができる。

○授業構想

単元展開「江戸幕府の成立と対外政策」もしくは「人権学習」	
教材との出会い (1時間)	丸子地域のお寺にある「差別戒名」について触れ、江戸時代の身分制度について触れる。 Q.なぜ異なる戒名を付けたのだろうか？
深まり (1時間)	実際にお寺に行き、差別戒名の経緯を聞く。
まとめ (1時間)	現在の日本の部落差別の現状について知る。

○委員会に参加しての学び

- ・実際に農園に行くことでわかる山崎さんの思いや工夫に触れる経験はただ教科書で学ぶ学習に比べると一生残る知識や思い出になると感じた。

5 塩田中学校 S教諭

○地域素材の教材化について

- ・見つけた素材：(地形図)
- ・実践可能な学年：2学年「身近な地域の調査」
- ・教材化することで見えてくる素材の可能性

現在の自分たちの住む地域を客観的に見ることができ、地域の特色や時代の中での変化、地域の課題を見つけることができる。

○授業構想

単元展開	
教材との出会い (1時間)	地形図の授業で、最初に中塩田のグーグルマップと地形図を出し、どのようなことが読み取れるかを考える。
深まり (2時間)	○地図記号を確認しながら、自分たちの地域にはどんな特徴があるのかを見つける。 (盛んな産業を見つける) ○過去の地形図と現在に近い地形図で、変化を見つける。 ○断面図を使いながら自分たちの地域の特徴を捉える。
まとめ (1時間)	練習問題をやりながら知識を確認し、単元の振り返りを行う。

○委員会に参加しての学び

地域の教材を使うことで、想像しながら学ぶことができたため、より積極的に学ぶ姿勢があった。また、学ぶ中で、新たに知った地域の変化や課題を見つける様子もあった。  
新たに自分たちで疑問をもつ姿が見られ、より深めていけたらよかったと反省もあった。

6 東御市立北御牧中学校 F教諭

○地域素材の教材化について

- ・見つけた素材：農産物（八重原米・御牧原白土ばれいしょ）
- ・実践可能な学年：2学年
- ・教材化することで見えてくる素材の可能性

本校の立地する東御市北御牧地区は中央を流れる鹿曲川を境に、「八重原」と「御牧原」に分かれ、それぞれに地形的な制約のもと、特色のある農業が展開されている。農業に携わる家庭の生徒も多く、自分たちが暮らす「北御牧」の魅力の再考と、地理的な理解の深まりが期待できる。

○授業構想

単元展開	
教材との出会い (2時間)	<p>単元：中部地方（中央高地）</p> <p>中部地方の中央高地に位置する地域の農業を学ぶ生徒が、中央高地の気候に合わせた特色ある農業を学ぶ場面で、自分たちの暮らす東御市北御牧地区の農業の特色との対比を学ぶ活動を通して、自らの住む北御牧への愛着と地理的な理解を深めることができる。</p> <p>①中央高地の農業について基本的な知識を学習する。</p> <p>②自分たちの住む東御市北御牧地区でも同じ特色があると言えるか、資料や自分たちの生活圏の実態を活用して比較し、違いに気づく。</p>
深まり (4時間)	<p>学習問題：「標高の高い東御市北御牧地区では、なぜ中央高地の農業のような特色が見られないのだろう」</p> <p>学習課題：「『八重原米』『御牧原白土ばれいしょ』の栽培の様子から北御牧地区の農業の特色をさぐろう」</p> <p>③④テーマ別でグループを分け、各グループでの資料の探索活動を通して、基本的な北御牧の農業の特色を共有する。</p> <p>⑤⑥各グループでテーマに沿って集めた情報を別のグループで共有（みんなで語りタイム）し、不足する情報を補完し合う（ジグソー学習）。</p>
まとめ (2時間)	<p>⑦⑧調べた内容をもとに学習問題に対するテーマ別の結論を発表する。</p> <p>例)「御牧原」地区では、降水量が少なく台地であるため、水不足に悩まされる中で、ため池を利用し、もともとある肥沃な土壌を活用した質の高い農産物生産が盛んである。</p>

○委員会に参加しての学び

本委員会に1年間参加して感じたことは、「教師の熱量次第で、いくらでも地域素材は発掘できる」ということ、「発掘した地域素材は、共有し、ある程度のパターンを用意しておくこと」が重要であると感じた。すべての教師、児童生徒が社会科を好きなわけではないということを念頭に、誰でも参加でき、取り掛かりやすい学習素材として、地域素材を活用した実践例を蓄積することが重要であると感じた。

## 五 研究のまとめ

### 【成果】

本年度の社会科学習指導委員会は、上小社会科研究会と連携し、より専門的な視点をもった先輩の教諭方と研究テーマである「社会的事象を身近な事象と捉える」に向け、地域素材の開発に力を注ぐことができた。特に小学校中学校で同じ「農家の山寄さん」を学習の中核に据えて学びを展開することができた。これは、指導委員会で行ったフィールドワークだけでなく、幾度となく行われた上小社会科研究会の中で、多くの教諭方と素材のもつ意味についてそれぞれの視点からアドバイスをいただいたことで教材としての可能性が広がったといえる。そして、地域の「ひと・もの・こと」を扱うことで、より子どもたちが自分事として社会的事象を捉えていく姿につながっていったように感じる事ができた。

また多忙の中で毎時間の教材研究が難しい昨今、教材の共有が進むことで、新たな小中連携の在り方にもつながるものになったのではないかと考える。

### 【課題】

本年度、地域素材を委員がそれぞれ持ち寄り、小中に分かれて教材化の可能性について話し合う場を設けたが、委員の多さと教材の複雑さから、一人ひとりの地域素材をじっくり研究する時間を設けることができなかった。今回、北小のS教諭と第三中学校のN教諭が行った教材研究のように、素材をピックアップして全委員で教材研究に取り組んでいった方が良い。

### 【次年度へ向けて】

- ・上小社研との連携は来年度以降も実施していく。その際の線引き（社研の目標と社会科委員会の目的を合わせていくのか）についても協議していく必要がある。
- ・委員会を通して、教材を開発していく良さや必要性を学べたので、来年度も継続して教材開発に視点を当てた研究になると良い。

### EX)

- ・社会見学の見学場所についての学びを深める研究（子どもたちとの出合わせ方など）
- ・社会科研究の構造を研究（同じ教材を活用した小中のつながりをテーマに）